

【最終試験の結果】

この研究内容を公聴会において口頭発表を行い、以下の質疑応答が行われた。

- ①日光弾性線維症は病的なものか生理的なものか、②紫外線の関与はどの程度か、
- ③グルコースで CML はできるのか、④糖尿病患者では光老化が起こりやすいか、
- ⑤病理組織と臨床症状は相関するのか、⑥変性したエラスチンが CML 化されやすい可能性は、
- ⑦使用したエラスターゼの基質特異性は、⑧濁度の上昇の意味は何か、
- ⑨CML 化するとリゾチームが結合しやすくなるのか、などが質問され、全ての質問に適切な回答がなされた。

その結果、皮膚科学及び生化学一般において、学位授与に相当する十分な学識を有する事が認められ、最終試験に合格した。

氏名	岡田紀久子
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	医第1100号
学位授与の日付	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	Standardization of laparoscopically assisted vaginal hysterectomy for uterine myoma and uterine adenomyosis at a single institution (単一施設における子宮筋腫・子宮腺筋症に対する腹腔鏡補助下膣式単純子宮全摘術の標準化の試み)
論文審査委員(主査)	教授 星 合 吳
(副主査)	教授 奥 野 清 隆
(副主査)	教授 竹 山 宜 典

論文審査結果の要旨

【目的】

単純子宮全摘術には、total vaginal hysterectomy (TVH) とtotal abdominal hysterectomy (TAH) があり、2法はすでに標準手術となっている。近年腹腔鏡を用いた単純子宮全摘術が出現し、われわれは LAVH を積極的に導入してきた。laparoscopically assisted vaginal hysterectomy (LAVH) を標準手術として確立することが、最終的な目標である。今回われわれは、LAVH が標準手術として確立されたかを検討したので報告する。

【方法】

1995年より2001年までにエキスパートによってLAVHを施行した282例(I群)と術式、適応の確立された2002年より2010年までにエキスパートの施行した258例(IIa群)とその他の産婦人科医の施行した83例(IIb群)に分類した。3群間で年齢、経産回数、子宮重量、手術時間、出血量、術中合併症における開腹移行率、術中、術後合併症率の比較検討を行った。また、当院における単純子宮全摘術の全体数に占めるLAVHの割合を1995年より2010年までの年度別に検討した。

【結果】

I群、IIa群、IIb群の平均年齢は、45.4歳、45.1歳、45.5歳となった。経産回数は2.0回、1.9回、2.0回。出血量は、209ml、231ml、223ml。術中合併症における開腹移行率は、2.8%、2.1%、1.0%。術中合併症率は、2.5%、4.1%、3.1%。術後合併症率は1.2%、2.3%、2.4%。以上の項目は有意差を認めなかった。一方、子宮重量は、400g、411g、350g。手術時間では、143分、143分、163分。両者ではIIb群が他の2群と比較し有意差を認めた。また単純子宮全摘術の全体数に占めるLAVHの割合は、1995年では16.2%であったが、年々増加の一途をたどり、2010年では85.7%となった。

【考察】

出血量、合併症率に3者で有意差がなかったことよりLAVHは誰にでも安全にできる術式であると考えられる。それに近年では、LAVHが単純子宮全摘術の大半を占める術式になっている。よって当院における単純子宮全摘術において、LAVHが標準手術として確立したと言える。

博士論文の印刷公表	公表年月日	出版物の種類及び名称
	平成23年12月 日 公表予定	出版物名
	公表内容	Japanese Journal of Gynecologic and Obstetric Endoscopy
	全文と要約	平成23年12月 日 発行予定

論文の概要は下記の通りである。

【緒言】単純子宮全摘術は産婦人科領域における基本手術の一つである。単純子宮全摘術には従来から腹式と腔式があり、この2法はすでに標準手術とされている。一方腹腔鏡手術は未だ新しい方法であり、そのすべてが標準化されているとはいえない。当科では腹腔鏡を用いた単純子宮全摘術の1法である腹腔鏡補助下腔式単純子宮全摘術(Laparoscopically Assisted Vaginal Hysterectomy;以下LAVH)を1995年から積極的に導入してきた。手術の標準化は術式の設定、適応の検討、標準化の順で行われるべきである。当院でのLAVHは1995年から2001年までの7年間はエキスパートによってのみ執行され術式と適応が確立された。その後医局員全員が執刀する形で標準化に取り組んできた。本研究は新しい手法であるLAVHが単純子宮全摘術の標準手術となり得るかどうかを科学的に検証することを目的とした。

【方法】

(1) 当院でLAVHが施行された669例のうち、手術完遂例600例を対象とした。これを1995年1月より2001年12月までにエキスパートによって施行された282例(I群)と術式、適応の確立された2002年1月より2010年12月までに施行された387例(II群)に分類した。またII群を、エキスパート(日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医)7名の施行した258例(IIa群)とその他の産婦人科医が認定医指導の下施行した83例(IIb群)に分類し、I群、IIa群、IIb群の3群間での手術成績を比較した。統計処理は3群間の平均値の比較では、ANOVA検定を用い、Scheffテストを行った。すべての検定においてP value<0.05を統計学的有意とした。

(2) 当院における良性疾患に対する単純子宮全摘術の全体数に占めるLAVHの症例数を1995年から2010年まで年度別に検討した。

【結果】

(1) 3群間の平均年齢、経産回数に差を認めなかった。摘出子宮重量は、I、IIa、IIb群各々平均400g、411g、350gとIIb群で有意に低値であった。手術時間は各々143分、143分、163分とIIb群で有意に高値であった。手術出血量は各々209ml、231ml、223mlと差を認めなかった。術中合併症による開腹移行率は各々2.8%、2.1%、1.0%と差を認めなかった。術中合併症発症率は各々2.5%、4.1%、3.1%と差を認めなかった。術後合併症発症率は各々1.2%、2.3%、2.4%と差を認めなかった。

(2) 良性疾患に対する単純子宮全摘術の全体数に占めるLAVHの年度別の割合は、1995年度では16.2%であったが、1998年には50%を超え、その後も年

々増加し 2010 年度には 85.7%とも最も優勢な手術となった。

【考察】Ⅱb 群で摘出子宮重量が低値となり、手術時間が高値となった。これはエキスパート（技術認定医）以外の術者が比較的難易度の低い症例を選択したため、指導の時間を含むためと推測された。しかし、手術成績において最も重要な因子である出血量、合併症発症率に関しては差を認めなかった。その結果、確立した術式、確立した適応の基、LAVH は誰にでも安全に遂行できる手術であると考えられた。また、良性疾患に対する単純子宮全摘術の中で最も優勢な手術となっており、当科においては LAVH が標準化されたと言える。

単純子宮全摘術は産婦人科領域における基本手術の一つである。単純子宮全摘術には従来から腹式と腔式がありこの 2 法はすでに標準手術とされている。本論文は新しい手法である腹腔鏡補助下腔式単純子宮全摘術（LAVH）がその中の標準手術と成り得るかどうかを科学的に検証したものである。申請者は当院産婦人科内視鏡手術チームの一員として長年本研究に取り組んできた。手術の標準化は術式の設定、適応の検討、標準化の順で行われるべきである。当院での LAVH は 1995 年から 2001 年の 7 年間はエキスパートによってのみ執刀され術式と適応が確立された。その後医局員全員が執刀する形で標準化に取り組んできた。その手術成績の詳細な検討結果を発表した。その結果、当院における LAVH は誰にでも安全にできる術式として確立されたと考えられた。また、現在本手術は 2010 年で良性疾患に対する全単純子宮全摘術の 85.7%を占めるまでに至っており、単一施設において標準化が完成しているものと考えられた。

近年、手術学の世界において「標準化」という用語が良く使われる。手術における標準化とは、多数の手術法の中から標準とされる手術術式を確立する過程である。近年とくに内視鏡手術の発達により、「内視鏡手術の標準化」が研究されるようになった。しかしながら、本邦、世界的に見ても一手術の標準化を科学的に検証した報告は皆無に等しい。本論文は腹腔鏡を用いた単純子宮全摘術の一手法である LAVH の標準化に関する研究であり、まさに新しい視点からの報告であるといえる。また本論文は日本産科婦人科内視鏡学会の機関誌である Japanese Journal of Gynecologic and Obstetric Endoscopy に英文で掲載予定である。よって学位授与に値するものと考えられた。

氏 名	片 岡 多恵子
学位の種類	博 士 (医学)
学位記番号	農 第 1 1 0 1 号
学位授与の日付	平 成 2 4 年 3 月 2 2 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	Retrospective Evaluation of Tumor Markers in Ovarian Mature Cystic Teratoma and Ovarian Endometrioma (卵巣成熟性嚢胞性奇形腫および卵巣内膜症性嚢胞における血清腫瘍マーカー値の後方視的検討)
論文審査委員 (主 査)	教 授 星 合 呉
(副主査)	教 授 奥 野 清 隆
(副主査)	教 授 西 尾 和 人